随想

人の目

宮部鱒太

何か書けということで、兎も角筆を、とってはみたが、文章を書くことや、長々としゃべることは不得手である。不得手ということは、厭で下手くそということである。

大体俳人は、頭の構造が理論的ではない様で論理的でないから、きわめて非論理的な俳句という文芸に拠っているのである。

文章を書いたり、講演したりするには、起承転結など筋道をたて、理論的にものごとを整理した上で表現せねばならない。

そこまではよいとして、小生などは、だんだん書いたり、しゃべったりする内に、読む側や聴衆を意識しはじめる。無心ではなくて、色々気を配る、ついには気負ってみたり、誇張してみたり、すこしでも良く見られようとする。そこで内容はお粗末なものになって終る。俳句に於いても同様。若い頃は、何々大会の賞やら、何賞やらを得んと一生懸命になったものだ。人一倍人の目を気にして、多数の人に褒めて貰えるかという事に骨身を削ったものだ。

他人の目を意識すぎる訳である。

考えてみれば、世の中人の目を気にしてばかりでは、本音を抑えて、建前ばかり…ということにもなりかねない。まことに下らんことである。而し反面〝人の目を気にする〟ことは、色んな意味を含んでいるものである。

昔、中支戦線でのことだが。

某日山中で敵の不意急襲を受けたことがあった。恥づかしいことに真先に体を伏せたのは、小隊長の私であった（私の初めての戦闘）敵弾の中で、そっと周囲を見廻すと、部下の視線がみな私に集まっている。瞬間!!これでは部下に笑われるゾとの思いが頭をよぎった。恐る恐る起ち上り（格好だけは勇敢に）処置を指示し、ことなきを得た。この一瞬の部下の目を意識したことにより、なんとか小隊長としての責を果し得たと思っている。その瞬間には、国家、忠、責任等の思いでは無くて、只恥しいからということだけであった。

某という友人が居たが、同じ仲間から借金をする時に、彼は借用証の代りに、名刺の裏に「返金出来なかったときは、友人らの面前でお笑い下され度く」と書いて昔の武士を気取っていたものだ。これも良い意味に於ける〝人の目を気にする〟ことであろう。

自らを律することに於いて、〝人の目〟は、また欠く可からざるものと云っていいだろう。

人は夫々社会の中で生きていくのだから、他の目を気にすることは、自ら社会の秩序を保つことに通じていく訳である。

理屈は解っているもの、、年を取ってわがま、になった小生には、この人の目はいささかわずらわしくなって来たようである。ようやく此の頃人の目をあまり気にせず作句する様になってきた。人のために俳句を作る訳ではなし、己れが納得すれば可し、人の世の中にあってもせめて、俳句の世界では、本音ばかりで呼吸をしたいと思う。よく云えば〝ひらき直り〟悪く云えば図々しくなったことであろうか。

気がむけば傀のむこうを恵方とす。

（現代俳句協会員
京廉子海程同人）

はついち

竹野美智代

十年がひと昔なら四昔も昔、ポイジャーが何年と宇宙を飛び続けて探しても、生き物の住める星は地球ひとつだったと誰も知らなかった頃、化学文明の進み過ぎていない、その辺に生まれて十年足らずの女の子に、早春は生まのまんま訪れた。その先鋒は隈府の町の初市が担いでくるのだった。

嬉しい前夜の枕元に、毎年きまって、祖母が、コウダテとやらの袋を縫っていた。手漉きの和紙の袋は、翌朝米一升にふくらんで、初市の商家への程よい手土産となっているのだった。コウとはどういう字で書くのか、いつの何様の世からの慣わしかは知る由もないが、とに角三つ四つの袋を木綿風呂敷に包んで、根ぶちのステッキに、裾をはしょった祖父にまつわりながら、女の子は初市めざしてステップを踏むのだった。

そのコウダテは、様々の苗木や産物のバザールで賑わう、中町の、祖父の従妹の、酒造家や、鋤鍬の上町の金物屋、今はない雑貨屋など、かねて懇意の商家に、挨拶替りの手土産として配られた。

暮れや正月の買物の折に忙しい商家から、降り出した雨に、傘などさし出され乍ら、「初市なっと出なはりまっせ。」と声をかけられるのは常識であった。それに応えての、コウダテだったのだろう。田所からは、米や粉を、畠所からは、小豆や大豆、山の村からは茶や椎茸を、思い思いに袋につめて、手みやげに、町からは心のこもった酒肴のもてなしを受けるのであった。もう名残りもなく移り変わった世を歎く訳ではないが、人の心のつながりがなつかしい。生産者と消費者、工と農もっと思えば師と弟、親子。

わび助一本が欲しくて、今年の初市に出てきて、こんな事を思いながら歩いていると、ふと或苗木屋の、小母さんに出逢った。むこうは多い相手のうち、何年か前、嫁の身の小遣いをはたいて、吹きあげ絞りの椿を買った時、快く値引きをしてくれた人である。去年はバラと、金柑子の苗を買った。バラは奇麗に咲いた。金柑子は何故か枯れた。「惜しかった。」とついもらしたら、この人、「なあんね、もいっちょ植えてみんね。」と言いながら艶やかな苗を包みはじめた。「いくらね。」と私、「金なんかいるもんね。」

吃驚する私に苗を押しつけるので慌てて金を取り出そうとしたはづみに、赤か白かの硬貨がこぼれた。「これでよか。」と小母さんは金を拾ってちょっと押し頂き、私の背中をちょんと敲いた。一瞬背中が温かった。早春の光が眩しかった。もうこの人ごみの中には、なかろうと決めていたものが、苗木のはざまに、こぼれていた。

私は来年、またこの人に巡り逢うであろう。たかが、五六百円の米一升でも、心をこめて月日をかけた、私の菊池米をさげてこの人に逢うであろう。千金の心をつなぐ事が出来るならばと。

（主婦）

A級運転

金津通夫

良い運転とは?と改めて聞かれると、はて何だろうと考えさせられる。

私はそんな時決って「その車の性能に一番マッチした運転」と答えることにしている。右も左も車の洪水だが、車は人間の顔の様に皆違う。車名、型式が同じ新車でも夫々少し宛違った味がある。新車で販売される時は、或る誤差範囲内で同じものとして販売されているに過ぎない。では同じ新車のどこが違うか?

エンジンや足廻りの機構は、或る誤差範囲内での鋳造、鍛造、切削、研磨等の組合せの産物である。車体も併せて違うのが道理である馬力も新車の時はカタログ通り出て居ないのが通常で、これも組合わせた部品の躍動面の滑らかさが時間をかけて作られる、つまり磨擦が少くなる迄は、カタログ通りにはならない。従って新車の慣らし運転の時期から徐々に馬力が上り、一番強い時期を経て、次は次第に磨耗による馬力低下の過程を辿る事になる。又エンジンは或る温度での膨張係数を考えて設計してあるので、規定の温度になる迄は、夫々の部品がバラバラに膨張する。潤滑油の状態も併せて冷却時の運転は、エンジン自身の抵抗が大きく、磨耗も激しい。暖気運転の有無はエンジンの寿命を大きく左右する。足廻りの機構も慣らし運転や潤滑油の条件で同じ様に大きく違ってくる。

寒い朝エンジンを始動して直ぐ、空ぶかししたり、走り出したりするのを見ると私はゾッとする。

エンジンの話のついでに余談になるが、排気公害がやかましくなった当時は、半ば泥縄式に排気対策が行われた。問題はNOX（窒素酸化物）とCO（一酸化炭素）HC（生ガス）である。現在の一般的なレシプロエンジンでは、燃焼が良いとCOは少なくなるが、NOXが多くなる。そこで排気ガスの一部を吸気側にとって燃焼状況を変えてNOXを少くしようとする。つまりNOXとCOの妥協点をギリギリ探って、排気に出る余分のCO、HCをサイレンサーで燃焼（触媒で環元）させる訳だ。シリンダー内に排気が残る仕組みのエンジンも理屈は同じである。当時排ガス対策車は燃費が一割悪く、値段が一割高く、馬力が一割落ちると言われた由縁である。最近は技術の急速な進歩で、目を見張る様な改良が進められているが、この因果関係は燃焼構造が変らない限り同じである。

さて本題に戻って、エンジンの性能では最高回転数、最高トルクが良く売りものになる。忘れてならない事は、最高トルク時の回転数域で、之を常用回転数として車を使うのが一番利口な運転になる。ダンプカーとスポーツカーでは常用回転数も適応車速も違う。最近は高速型の車が増えて、オーバードライブギヤーでエンジンの無駄な高回転を防いで居るのが多い。常用回転数域を下廻る時は、力不足でシフトダウンするが、高速道路では大きく上廻って燃費を甚しく悪くしていることは昨今普通になってしまった。

エンジンと車速を一例に述べたが、車の構造は多様で、ボデー、ハンドル、ブレーキ等々夫々の車は特色を持ち、買う方もそれに魅力を感じる。

車の性能が一番発揮出来る即ち車に応じた運転が最高ですという由縁である。そして生れる安全運転こそ最高のA級運転ではなかろうか。

（熊本いすゞ自動車社長）